

優秀賞

失敗から学んだこと

指宿市立指宿商業高等学校2年 杖谷 理子

「ごちそうさま。」と言って今日も台所へ弁当を持っていった。その弁当箱を洗うためふたを開けた母は、「残したの?」と聞いてきた。何日か残す日が続き、「食べ切れなかった。」と言ってしまった。そして、母に言われた。「明日は自分で作ってみたら?」と。

次の日自分で作ってみた。アラームを五時半にセットした。いつもより一時間前に起きることはとても大変だった。頑張って起きたが目は覚めない。エプロンを着てキッチンに立って食材を切り始めた。玉ねぎを切ると涙が出てきた。一品を作り終え、二品目を作り始めたが、気付かないうちに時間はどんどん過ぎていた。前日に作るおかずの計画を立てていたが、全てを作ることは無理だった。作り終えたものを弁当箱に詰めることも予想以上に難しかった。いざ作ったものを朝ごはんに食べてみた。自分で作ったものを食べる時、とても不安だった。長い時間をかけて作った分胸がいっぱいになり少し食べただけでお腹もいっぱいになってしまった。私の作ったおかずを母が食べ、「おいしい。」と言ってくれた。その言葉が一番嬉しかった。学校に行き、授業を四時間終え昼食の時間になった。いつもは食べ切れなかったが、今日はなんとか食べ切った。帰宅後台所へ弁当箱を持って行き、自分で洗った。いつも母に任せていたが、自分で全て作ることに、母の大変さとありがたさがわかった。それと同時に、「おいしい」と言われたときの嬉しさも知ることができた。

それからは時には母にかわって弁当を作る日もあった。そして母が作ってくれ、食べ終えた空っぽの弁当箱を持って台所へ行った。

今までは「ごちそうさま」の一言。

今は、「ごちそうさま、おいしかった」。